

俊成卿女家集論

「千五百番百首」の配列について

永田 初枝

現存『俊成卿女家集』は全四部から成るが、自撰部分は、第一、八十三首のみで、それが『俊成卿女家集』の原型であると推測されている。その自撰部分は、巻頭四首、「千五百番百首」十四首、「仙洞五十首」十四首、「北山三十首」二十二首、「衛門の督の殿への百首」二十四首、哀傷歌五首から成り、巻頭の四首と末尾の哀傷歌五首を除いては、定数歌の中から数首を選び入れる形で編まれている。その内、「千五百番百首」と記されている十四首は、建仁年間、『千五百番歌合』のために詠進された百首歌中の歌である。

『千五百番歌合』のための百首（以下「千五百番歌合百首」とする）の中から、俊成卿女は、春一首、夏二首、秋四首、冬一首、恋六首の十四首を家集に入れている。それらの十四首に関して、『俊成卿女家集』の本文と「千五百番歌合百首」の本文との異同及び、配列・部立の違いを森本元子氏が指摘されている。氏は『俊成卿女の研究』の中で、家集と「千五百番歌合百首」との本文の異同を「これは単純に考えれば、千五百番百首の草稿と清書献上本との間の異同に加え、家集に収録する際、草稿に多少の手を入れることから、当然生ずる異同である。その上に百首が歌合に結番され、それが転写される間に生ずる異文があり、家集が成つてのちも作者自ら改める場合もあり、後人による故意または無意識の異同も生じうる。」とされ、また配列・部立の違いを「抄出十四首中第九首（恋の第一首）までは千五百番歌合における順序と同じであるが、恋の部には

歌合とくらべて順序の混乱がある」「雑部を立てず、これに相当する作二首が恋の部に混入している」としておられるのである。本稿では、それら本文の異同はどのように生じたのか、また配列・部立の差異は、はたして「混乱」「混入」であるのか、『俊成卿女家集』における「千五百番百首」の各歌の配列の原理を解明し、それを尺度にその問題を考察する。

先ず、『俊成卿女家集』に収められた「千五百番百首」を掲げ、問題点を具体的に示す。『俊成卿女家集』は日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』や森本氏編著『俊成卿女全歌集』³に翻刻されている書陵部C本を底本とし、家集と比較する『千五百番歌合』は古典文庫本を底本とする。『俊成卿女家集』にも『千五百番歌合』にもそれぞれ十数本の伝本が存在し、相互に複雑な異同が見られる。が、本稿は、家集中の「千五百番百首」歌と俊成卿女の「千五百番歌合百首」歌とで明かに違いがある箇所についてその理由を考察するものであり、従つて、それぞれの伝本間相互の異同については、ここでは言及しない。

歌の最上段に付した番号は『俊成卿女家集』の歌番号であり、括弧の中は俊成卿女の「千五百番歌合百首」の部立と、百首に一番から百番まで仮に付けた歌番号である。

千五百番百首の中

春

5 (春二) 開けやらぬ谷の戸過ぐる春風にまづ誘はるる鸞の声

夏

6 (夏三三) 沢水に秋風近し行く蛍迷ふ光もかけ乱れつつ

谷の清水の音聞けば(千五百番歌合百首)

7(夏三三) 岩たたく谷の下水音分けて結ばぬ袖ぞまだき涼しき

秋

8(秋三八) 渾はふ宿とは分かず秋は来て心尽しに月ぞ洩りくる

9(秋三九) 秋風に外山の鹿は声立てて露吹き結ぶ小野の浅茅生

10(秋四一) 風吹けばしのに乱るる刈萱も夕は分きて露こぼれけ

り

11(秋五二) 月見ばと頼めし秋の夜もすがら又恨めしく搦つ衣哉

冬

12(冬六六) 松島や小島が磯に寄る浪の月の水に千鳥鳴くなり

恋

13(恋七六) 知らざりき結ばぬ水に影見ても袖に雫のかかる物と

は

14(恋八一) 夏衣薄くや人のなりぬらむ空蟬の音に濡るる袖かな

15(恋八六) 見る程ぞしばし慰む嘆きつつ寝ぬ夜の空の有明の月

16(雑九八) 清見渦うき寝の浪に宿る夜は月に心のとまるなりけ

り

17(恋八〇) 思ひ寝の夢の浮橋途絶えして覚むる枕に消ゆる面影

18(雑百) 清き離れゆく月影ぞ哀れなる虫明けの松の風の音哉

先ず、本文の異同について見ておく。

7番歌は、二・三句目「谷の下水音分けて」が、「千五百番歌合百首」では「谷の清水の音聞けば」となっている。「千五百番歌合百首」には家集と同様の本文を持つ伝本はなく、家集の方も、群書類従本が「谷の下水音聞けば」とする他は、全て一谷の下水音分けて」である。これは、注目すべき異文であり、「千五百番歌合百首」

から家集に入れる際の改作の可能性について、後に詳しく考察する。

次に、部立と歌順について見ると、先ず、四季の部は、森本氏が言われるとおり、部立、歌順共に「千五百番歌合百首」のそれに準じているが、恋の部においては、歌順が一部分入れ替わっている上に、雑の二首が入っている。四季の部と同様に「千五百番歌合百首」の歌順の通りに歌を配列するとすれば、17番の歌は、13番と14番との間に配列されるはずであり、また16番歌と18番歌は、雑の部の歌なのである。

では、何故このように歌順や部立に違いが生じたのであろうか。また、7番歌の本文の違いはどうして生じたのであろうか。それについて、家集の中の「千五百番百首」の配列を手がかりとして考察する。

『俊成卿女家集』の中の「千五百番百首」の配列を見る前に、俊成卿女の「千五百番歌合百首」そのものの配列を最初の十首を例に見てみることにする。

春一

- 1 出づる日の光もしるし天つ空くもりなき代の春のはじめは
 - 2 明けやらぬ谷の戸過ぐる春風にまづ誘はるる鶯の声
 - 3 昨日まで閉ぢしつららの池水にいつ春風の浪を解くらん
 - 4 春日野の雪間を分けて尋ねれば草のはつかに春めきにけり
 - 5 山里は猶降る雪の消えがてにまだき梢に花ぞ散ける
- 春二
- 6 梅の花飽かぬ色香も昔にて同じ形見の春の夜の月
 - 7 鶯のねぐらにならず梅が枝にをのが羽風も身にやしむらん

8 風通ふ寝覚めの袖の花の香に薫る枕の春の夜の夢

9 つれづれの勝るながめは徒らに春の雨とて降ればなりけり
10 あかなくに帰る雲井に春雨の降るは涙か雁ぞ鳴くなる

1番から順番に歌題を辿ってみると、2番歌は鶯、4・5番は残雪、6番から8番までは梅、9番と10番は春雨、という具合に、春の歌題の歌を二、三首ずつまとめて配していく、という方法が採られている。それは、初めての組題百首としてその後の百首歌の配列に大きな影響を与えた『堀河百首』題も一つの歌題配列のパターンとなっていると考えられる。しかし、『堀河百首』の歌題の配列だけを参考にして歌が配列されているかという点、そうではない。

1番歌は「春のはじめ」の歌である。そして、まだすっかり春になりきってはいないことを歌う1番歌を承けて、2番歌では「明けやらぬ」という表現が使われている。しかも、1番歌の初句の「出づる」という言葉を承けて、2番歌では「谷の戸」という言葉が使われている。また、2番の「明けやらぬ」に対して「閉ぢし」(3番)という表現で、2番歌から3番歌へ歌がつながっている。さらに、まだ春になりきってはいない状態を詠んだそれら1番歌から3番歌までは、4番歌における「春めきにけり」という語句で、より一層季節の進行を感じさせている。

また、例えば6番に始まる梅の歌にしても、6番歌で突然「梅」が配されたのではなくて、5番の歌が「雪」という言葉で4番の歌と連続しながら、同時に「花」という言葉で6番歌からの「梅」の歌につなげていく、という配列の工夫がなされている。

このように、言葉の連続・連想と季節の進行の二つの原理によって歌を配列していく方法は、まさに『新古今和歌集』の配列の方法

である。『千五百番歌合』が詠進された当時、また『新古今和歌集』は編纂されていなかったが、倭成卿女は、「千五百番歌合百首」の配列に、後に『新古今和歌集』において試みられることになった、言葉の連想と季節の進行という二つの原理を併せた配列を試みているのである。

そのように工夫して配列された「千五百番歌合百首」の中から家集に選じ入れられた十四首の歌の配列は、言葉の連続・連想や季節の進行が考慮されていたかいないか、家集中「千五百番百首」の配列を、連続・連想と進行という二つの観点から考察していくこととする。

先ず、季の歌を、言葉の連続・連想に注目しながら見ていく。

春

5(春二) 開けやらぬ谷の戸過ぐる春風にまづ誘はるる鶯の声

6(夏三二) 沢水に秋風近し行く螢迷ふ光もかげ乱れつつ

7(夏三三) 岩たたく谷の下水音分けて結ばぬ袖ぞまだき涼しき

秋

8(秋三八) 薊はふ宿とは分がず秋は来て心尽しに月ぞ洩りくる

9(秋三九) 秋風に外山の鹿は声立てて露吹き結ぶ小野の浅茅生

(萩の葉に露吹き結ぶ秋風も夕ぞ分きて身にはしみける)

10(秋四二) 風吹けばしのに乱るる刈萱も夕は分きて露こぼれけ

り

(萩の葉に露吹き結ぶ秋風も夕ぞ分きて身にはしみける)

11(秋五二) 月見ばと頼めし秋の夜もすがら又恨めしく構つ衣哉

冬

12(冬六六)松島や小島が磯に寄る浪の月の水に千鳥鳴くなり

5番は、春の初めの歌である。「千五百番歌合百首」では、二首目の歌である。因みに、一首目「出づる日の光もしるし天つ空くもりなき代の春のはじめは一の歌は、『千五百番歌合』では宮内卿の歌と番えられて持とされている。権大納言忠良の判詞に「させる事なけれど祝の心あればいづれをまさると申しがたし」とあり、その歌は『千五百番歌合』という公の場に詠んだ百首歌の巻頭としては妥当であろう。しかし俊成卿女は、家集に選じ入れる際に、秀能と番えられて勝を取り忠良に「優に侍り」と判じられた、二首目の歌を選んだと考えられる。

6番では、初春から一息に晩夏へと飛躍している。「千五百番歌合百首」の順番で見ても、二首目から三十二首目へという飛躍である。その間には、『新古今和歌集』春上に採られた

梅の花飽かぬ色香も昔にて同じ形見の春の夜の月(「千五百番歌合百首」六首目)

と、同じく春下に採られた

風通ふ寝覚めの袖の花の香に薫る枕の春の夜の夢(同八首目)

の歌がある。「新古今和歌集」入集歌は家集に採らないという方針でもその二首は家集には入れなかったとしても、中春から盛夏までの歌は一首も採っていないのである。

二首目から三十二首目に至る三十首を何故家集に選じ入れなかったのか、「千五百番歌合百首」から家集には十四首しか採られていないこともあり、その選歌基準はわからない。しかし、それぞれの歌の配列が言葉の連想という原理によっていると仮定すると、5番

歌の「春風」と6番の「秋風」とがまさにその連想であることに気づく。まだ雪に閉ざされている谷の戸を春の訪れを告げる「春風」として通り過ぎた5番歌の「風」が、いま、秋の到来を告げる「秋風」となって、沢水に吹き込もうとしていると歌が配されているのである。精密とは言えないまでも、5番から6番への歌の配列には、連想の原理が働いている。

6番歌と7番歌とは、「千五百番歌合百首」でも順続きであり、「沢水」と「下水」という連想により配列されていると見てよい。

7番歌と8番歌との言葉の連続は、「谷の下水音分けて」の「分けて」と「葎はふ宿とも分かず」の「分かず」との「分く」という語である。

ところで、家集の7番歌は、先に指摘したように「千五百番歌合百首」の本文との間に異同が見られる歌である。ここで、家集の本文と「千五百番歌合百首」の本文との相違の原因を考察する。

家集7番歌の本文で「岩たたく谷の下水音分けて」とある部分が、「千五百番歌合百首」では「岩たたく谷の清水の音聞けば」とある。しかし、今述べたように、家集7番歌と8番歌との言葉のつながりは「分く」なのであるから、7番の本文が「千五百番歌合百首」の本文の通り「音聞けば」であっては、連想の鎖が途切れてしまうことになる。そこで、俊成卿女は、この歌を家集に入れる際に「音聞けば」を「音分けて」に改めたのではないだろうか。「音分けて」と改めることにより、8番の「宿とは分かず」の「分く」の語に連続させようとしたと考えるのである。そして、歌の本文を、ただ「音を聞く」のではなく、「音を聞き分ける」意味の「音分く」に変えたことにより、「聞き分ける」動作の対象をも、目に見える「清

水」ではなく目に見えない「下水」に改めた、こう考えるのである。但し、「音聞けば」を「音分けて」と改めることにより、「清水」を「下水」に改めることが妥当になるかどうか、検討を要しよう。以下に「聞き分く」という語がどのような意味で詠まれているか、また「清水」と「下水」とはどのように区別されて詠まれているか、あらましを見てみる。

① 木枯の音に時雨を聞き分かで紅葉に濡るる袂とぞみる

〔新古今集・冬・五七五・中務卿具平親王〕

② 浅茅生に秋待つほどや忍ぶらん聞きも分かれぬ虫の声々

〔風雅集・夏・四三八・寂蓮〕

③ 嵐越す嶺の木の間を分け来つつ谷の清水に宿る月影

〔山家集・九四六・題知らず〕

④ 関越えてあはずの森の逢はずとも清水に見えし影を忘るな

〔後撰集・恋四・八〇一・読み人知らず〕

⑤ 山風に散り積む花の流れずはいかで知らまし谷の下水

〔千載集・春下・一〇〇・花園左大臣〕

⑥ 谷川の上は木の葉に埋もれて下に流ると人知るらめや

〔金葉集・恋上・三六八・実行〕

⑦ 見るままに冬は来にけり鴨のゐる水際の水薄凍りつつ

〔新古今集・冬・六三八・式子内親王〕

⑧ 冬来れば谷の下水音絶えてひとり凍らぬ嶺の松風

〔千五百番歌合・冬三・九八八番右・忠良卿〕

①の「木枯の音と時雨の降る音聞き分けず」、②の「いろいろな虫の声を聞き分けることができない」により、「聞き分く」が単に音を聞くのではなく、聞き分けるといふ動作であることが明瞭で

ある。また、③④及び⑤⑥により、「清水」は目に見え、「下水」は目に見えないこともわかる。さらに、⑦と⑧とを比較することにより、「入り江の水」は視覚によって凍結したことを知るが、「下水」は聴覚によってその存在を知るしかない、つまり「下水」は音を聞き分けなければならぬということがわかる。

こう見ると『俊成卿女家集』7番歌において、8番の歌との連続を円滑にするために「音聞けば」を「音分けて」に改めた俊成卿女は、「音分く」という動作から、「谷の清水」を「谷の下水」に改める必要があったと見てよいと思われる。

9番歌は「千五百番歌合百首」の歌順でも8番歌の次に位置し、「葎」と「浅茅生」が言葉の連想となっている。

10番の歌は、「千五百番歌合百首」では9番歌との間に「いかなりし夜半のあはれに月もまた秋に光を契り初めけん」の歌を夾んでいるが、「秋風」(9番)と「風」(10番)、「露吹き結ぶ」(9番)と「露こぼれけり」(10番)など、9番と10番は共通した語を多く持ち、また、言葉の連想を考えると、「葎」(8番)↓「浅茅生」(9番)↓「刈萱」(10番)と、「スミズ」(8番)↓「浅茅生」(9番)↓「刈萱」(10番)と、「スミズ」(8番)↓「浅茅生」(9番)↓「刈萱」(10番)と、スムーズなつながりがみられる。歌の進行を考え、「いかなりし」の歌を家集に入れずとも、歌は連想の原理で配し得たと考える。また、9番歌と10番歌は、共に『源氏物語』蜻蛉の巻の「萩の葉に露吹き結ぶ秋風も夕ぞ分きて身にはしみける」の歌を本歌としており、その連想もあろう。「いかなりし」の歌は除かれるべくして除かれたのである。

10番歌と11番歌は、「夕」と「夜もすがら」という言葉の連想がある。12番歌は、「月」が11番歌と連続している。

以上、家集「千五百番百首」の季の部の配列について考察してき

た。歌数が少ないので、『新古今和歌集』程の言葉の連続・連想による綿密な配列というには及ばないが、『俊成卿女家集』中の「千五百番百首」の配列を見ていくと、7番歌は、家集の配列を工夫してゆく過程の中で改められた可能性が大いに考えられる。

次に恋の部の配列を見ていく。

恋

13(恋七六)知らざりき結ばぬ水に影見ても袖に雫のかかる物と

は

14(恋八二)夏衣ゆくや人のなりぬらむ空蟬の音に濡るる袖かな

(空蟬の羽におく露の木隠れて忍びく／＼に濡るる袖哉)

15(恋八六)見る程そしばし慰む嘆きつつ寝ぬ夜の空の有明の月

(見る程を暫し慰む巡り逢はむ月の都は遙かなれども)

16(雑九八)清見潟うき寝の浪に宿る夜は月に心のとまるなりけ

り

17(恋八〇)思ひ寝の夢の浮橋途絶えて覚むる枕に消ゆる面影

18(雑百) 漕ぎ離れゆく月影ぞ哀れなる虫明けの松の風の音哉

家集中「千五百番百首」の季の部に選び出された歌は「千五百番歌合百首」の歌順の通りに配列されていたが、恋の部においては、既に述べた通り、「千五百番歌合百首」の歌順とは一部合致しないものがあり、しかも、雑の二首が挿入されている。それらの問題について『俊成卿女家集』中の「千五百番百首」の配列を見ながら、その理由を検討してみる。

先ず、この恋の部の歌の配列を整理する。

13番の歌は「結ばぬ水に影見て一恋の涙に袖を濡らしてしまう初

恋の歌である。続く14番は初恋が「薄くや人のなりぬらむ」という疑問に変わっている。15番は「嘆きつつ寝ぬ夜」と嘆きの歌であり、16番も「浮き(憂き)寝の浪に宿る夜」と15番同様嘆きの夜が詠まれている。17番は「消ゆる面影」と恋の終焉が告げられている。18番も「漕ぎ離れゆく月影」と17番と共に恋の終わりを暗示している。このように、家集中「千五百番百首」恋の部は、初恋(13番)↓疑問(14番)↓嘆き(15・16番)そして終焉(17・18番)と恋の進行に従って歌が配されている。

次に歌語の連続やイメージの連想を検討してみる。

13番は冬の12番歌とは、「浪」「水」「水」「水」「水」「水」「水」(13番)という「水」のイメージによる連想がある。13番歌と14番歌との連想は、「水」「水」「水」(13番)と「濡るる」(14番)である。

15番歌は16番歌との間の言葉による連想はないが、15番歌は「空蟬の羽におく露の木隠れて忍びく／＼に濡るる袖哉」という『源氏物語』空蟬の巻の歌を、16番歌は、「見る程を暫し慰む巡り逢はむ月の都は遙かなれども」という、同じく『源氏物語』須磨の巻の歌を本歌としており、『源氏物語』を媒介とした連想が認められる。

16番は、15番の「寝ぬ」に「うき寝」(16番)が、そして15番の「見る」に「清見潟」の「見」(16番)が言葉の連続となっている。15番では、「嘆きつつ寝ぬ夜の空の有明の月」を「見るほどそしばし慰む」、16番は、「うき寝の浪に宿る夜は」「月に心のとまる」と、共に相手が訪れないつらい夜に月に慰めを求める心が詠まれている。

17番歌は、前歌から「うき寝」と「思ひ寝」、「浮き寝」と「浮橋」が言葉の連想である。

ところで、「千五百番歌合百首」の歌順からいえば、17番歌は13番歌と14番歌との間に来るはずの歌である。しかし、13番は初恋であり14番は恋人の心交わりを疑う疑問の歌であるから、17番歌をそのまま13番歌と14番歌との間に入れると、初恋と疑問との間に終焉が来ることになる。明かに恋の進行の乱れである。そこで、この歌を16番の嘆きの後に持ってきたと考えることができる。そうすることにより、恋の歌の展開をスムーズに進行させようとしたのである。しかし、もう一つ、16番の歌が「千五百番歌合百首」では雑の部に収められているという問題がある。初恋(13番)↓疑問(14番)↓嘆き(15番)そして終焉(17番)という恋の展開に16番歌は必要ではないとも言える。そこで、15番歌から17番歌への配列を考えてみたい。

言葉の上では「寝ぬ」(15番)と「思ひ寝」(17番)というつながりはある。しかし、嘆きながら寝た夜の有明の月を見て心が慰まるといふ、いわば「月」を詠んだ15番の歌と、恋人を思いながら寝たその夢の浮橋が途切れてしまって、目覚めると同時に恋人の面影が消えてしまったという「夢の浮橋」とは、どうも連想が密とは言いがたい。そこで、ここに「千五百番歌合百首」では雑の部にある歌だが、16番の歌を挿入してみると、15番とは「月」の、しかも嘆きをいやしてくれる「月」の歌としてつながっており、同時に「浮き寝の浪に宿る夜」が、17番の「夢の浮橋」を引き出す役目にもなる。つまり、「千五百番歌合百首」雑の部から抜きだした16番の歌は、15番と17番の歌をつなぐ、連想の架け橋となっているのである。「千五百番歌合百首」では雑の部の歌を家集においては恋の部に収

めた俊成卿女の意図はそこにあったと見てよい。

最後に18番の歌である。17番歌との言葉の連想は「浮き寝」と「漕ぐ」である。これも、「千五百番歌合百首」では雑の部の歌である。家集の伝本によっては、この歌がない本もある。しかし、この末尾に置かれた歌の役割は大きいと思う。

18番歌は、海上で「月」に「漕ぎ離れ行く」歌である。「漕ぎ離れ行く月影ぞ哀れる」と、月の哀れを強調した歌になっている。

「月」は、15番、16番の歌にも詠まれていた。「見るほどぞしばし慰」んだ「月」(15番)、「心のとま」った「月」(16番)、その「月」が、恋の終焉を迎え(17番)、今「漕ぎ離れ行く」のである。このように辿ると、この歌も16番歌同様、家集中「千五百番百首」恋の部の歌の連想と進行には欠かせない歌なのである。また、この18番の歌は「千五百番歌合百首」でも最後に配されている。「千五百番歌合百首」二首目の歌から最終歌まで、俊成卿女は、連想と進行の原理によって、歌を選び、家集に編み入れたのである。

以上、「俊成卿女家集」中の「千五百番百首」と俊成卿女の「千五百番歌合百首」との間で本文の違いや歌順・部立の違いが指摘されてきた箇所を、家集中の「千五百番百首」の配列原理という点から私なりに考察した。

その結果、大幅に歌語が変えられた家集7番歌は歌を言葉の連想によってスムーズに配列するために家集の編集過程の中で改められた可能性が考えられる。また、恋の部においては、恋の進行に従って「千五百番歌合百首」の歌順が一部入れ替えられたこと、さらに、恋の部の連想によるつながりを緊密にするために雑の部の二首が挿

入されたと考えられる。いずれも、家集としての配列を考慮に入れて『千五百番歌合百首』を改変しているわけである。

従来、『俊成卿女家集』は『新勅撰集』の撰集資料として定家に提出されたものであると考えられてきた。しかし、『俊成卿女家集』が『新勅撰集』の撰集資料であるならば、俊成卿女は何故『千五百番歌合百首』の歌順を入れ替えたり、雑の部の歌を恋の歌として家集に入れたのであろうか。また、なぜ俊成卿女は家集を編むにあたって『千五百番歌合百首』からこの十四首の歌のみを採ったのか、連想や進行の原理によって歌を配列するためであるならば『千五百番歌合百首』の中からもっと適切な歌を選ぶことはできなかったのか、という疑問が残る。『俊成卿女家集』の性格をより明かにするためにも、今後検討を要する問題である。

以上の問題点を考慮にいれ、今後、『千五百番百首』だけではなく、自撰部分全編の配列を詳しく分析し、俊成卿女がどのような意図や原理で家集を編纂していったのか検討する所存である。

〔注〕

- (1) 森本元子氏著『俊成卿女の研究』（昭和五十一年十一月、桜楓社刊）第七章 俊成卿女家集の形態と成立。
- (2) 注(1)の『俊成卿女の研究』第八章 俊成卿女家集論。
- (3) 森本元子氏編著『俊成卿女全歌集』（昭和四十一年五月、武蔵野書院刊）
- (4) 歌には、紙面の関係上、適宜漢字を当てるなど、校訂を試みた。
- (5) 『俊成卿女家集』の伝本は前掲『俊成卿女全歌集』を、『千

五百番歌合』の伝本は有吉保氏著『千五百番歌合の校本とその研究』（昭和四十三年四月、風間書房刊）を参照させていだいた。

- (6) 松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承——白河院期から宗徳院期へ——」（『文学語学』昭和四十九年七〇号）橋本不美男 滝沢貞男両氏著『校本 堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』（昭和五十一年三月 笠間書院刊）
- (7) 佐藤恒雄氏「衣を搦つ女——続後撰集の一考察——」（『国文学 解釈と鑑賞』昭和四十二年五月）に言及がある。
- (8) 森本氏は、『俊成卿女家集』には『新古今和歌集』入集歌が採られていないということなどから、『俊成卿女家集』を『新勅撰集』の撰集資料とされた。注(1)参照。
- (9) ①から⑧までの歌は『新編国歌大観』に拠る。
- (10) 以下、本歌として挙げた『源氏物語』の歌は『日本古典文学大系』に拠り、紙面の関係上、適宜漢字を当てた。
- (11) 注(3)による。

本稿は、昭和六十三年度北海道教育大学函館分校に提出した卒業論文の一部を再考したものである。卒業論文を執筆するにあたり御指導下さった諸先生、また、筑波大学において指導して下さった諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

（筑波大学文芸・言語研究科学生）